

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第一号
平成二十七年三月二十五日発行（抜刷）

資料紹介

江戸時代末期尾州常滑の下り廻船
― 勢州の間屋 ―

八木意知男

江戸時代末期尾州常滑の下り廻船
― 勢州の間屋 ―

八 木 意 知 男

□ 要 旨

近世の物資流通については未だ不明の点が多い。それは各家の土地離れと、輸送手段の変化が大きな要因である。一方近年、村興しや町興しと銘を打って近世の地域の復元を考えることが流行する。かかる時に当たり、近世末期の三重県の間屋商人達を紹介する。

紹介するのは愛知県常滑の某家の下り廻船と取り引きの存した商人である。要するに三重県の「此処にはこんな名の商人がいた」であるが同時に「此処のこの商人は尾州常滑の廻船と取り引きがあった」と言うことになる。

基本的には原寸大の商印の印影を以って紹介し、今後の指標となることを目的とする。念の為付言すれば、これは商取り引きが存在した証である故、他家資料で既紹介であつても問題ではない。少くとも愛知県常滑の某家資料は初開示であり、愛知県常滑の某家持船と取り引きがあったという事である。

□ キーワード

資料開示 下り廻船 間屋商印 江戸末期 尾州常滑
勢州と志州

はじめに

江戸時代末期の尾州知多郡常滑地区（現、愛知県常滑市域）は、木綿生産・窯業の町であると同時に海運の町としても栄えた。天保五年（一八三四）正月付の『常盤講組合』（年行司記録）に依れば、計五十八艘の廻船が数えられる。基本的には所謂下り廻船ではあるが、しかしこれ等の船が如何に運航され、何を何処から何処へ運んだかの実態を把握することは、資料の制約もあり、極めて難しい。そこで、ここでは仕切状を中心に積手板等を元に、そこに存する商人の署名印影を現三重県に限定して集成し開示する。

要は、愛知県常滑市の某家が所持した二艘の千石積廻船「神徳丸」・「神風丸」の記録である。

開示資料について

二艘の船は、下関・備後尾道・伊予・阿波・大坂・紀州・伊勢湾域から江戸・常州を場とした。豆州石廊崎を越した事は、伊豆子浦（現、下田市南伊豆町）の神明社玉垣に名の残る点からも知られ得る。

開示する記録は、天保五年から明治元年（一八六八）頃の商取引証文（送り状）・仕切状・積手板等に於ける発行者自署名部分である。ただし、詳しい内容にはふれない。この時期の家々は現在に残るものも多く、中に借金証文も含まれる故、単にこの時期ここにこんな商人が存したという記録である。しかも、ここに開示するのは印を伴うものに限定し、印影を読み取ることが可能である場合に限る。すなわち、愛知県某家の二艘の船と運送契約を結んだ商家名の一部分である。三重県に限定するのは、そこが知多半島の対岸である点に尽きる。

因みに、文政三年（一八二〇）正月出帆に際して船頭が所持した備忘帳『船玉并道具』（一冊）に記されている「諸国問屋附」の三重県部分は次の如くある。

津島	——
桑名	石砌類問屋 田嶋屋利左衛門
	垣問屋
	下り問屋
	登り問屋
四日市	垣問屋 浜田屋清三郎
	登り問屋 黒田久八
若松	——
白子	河合仁平治
津	——

松崎	——
大口	——
川崎	——
鳥羽	江崎九郎次郎
長嶋	——
尾鷲	浜中弥兵衛

これが航海に合わせた書き込みか否かは不明であるが、ここに記される問屋とは同一ではない。

開示要領は次の通り。

- (1) 本稿では、原寸大印影を紹介することを旨とした。
- (2) 印影を中心とするが、日付部分は可能な限り残した。障子の下張りに使用されたものはこの限りではない。
- (3) 幾度も登場するものに関しては、年紀に関係なく、可能な限り印影状態の良好なものを選んだ。
- (4) ここに紹介したものは、総て墨印である。
- (5) 便宜の都合上幾つかの地に区分したが、区分の基準は私意に依る。
- (6) 斎藤善之氏が内海船の下り塩流通について述べられる「近世後期における下り塩流通と内海船」（日本福祉大学知多半島編合研究所編『知多半島の歴史と現在』誌第四号、一九九二年十月）中の商人の印も含まれる事を記しておく。

〈陰影部〉

一 伊勢国長島

安政三年



二 伊勢国桑名

廻船積込
伊坂市々市



(安政三年)

江戸時代末期尾州常滑の下り廻船(八木)

②

勢別桑名
佐後孫吉



(安政五年)

③

伊勢国桑名
佐後孫吉




④

伊勢国桑名
佐後孫吉



⑤

市田信子
白鳥
書



⑥

市田
恒男




⑦

市田
信子



⑧

市田
信子



(明治二年)

(弘化四年)

三 伊勢国四日市

①ーア

市田
信子



(年不詳)

①ーイ

市田
信子

②

市田
信子



(嘉永元年)

市田
信子



(嘉永五年)

③

上り廻船
中津
仲茂
（嘉永五年）

④ーア

④ーイ

上り廻船

徳田氏
仲茂
（四日市）

④ーウ

上り廻船

徳田氏
仲茂
（四日市）

④ーエ

上り廻船

徳田氏
仲茂
（四日市）

四 伊勢国津

①ーア

上り廻船

徳田氏
仲茂
（七軒町）

①ーイ

伊賀屋
源七

伊賀屋
源七
（七軒町）

（安政四年）

②



③
ー
ア



③
ー
イ

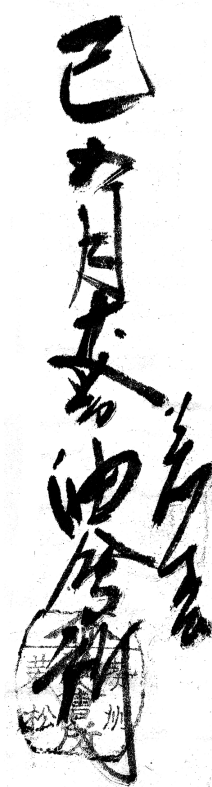


④



五 伊勢国若松

①



（安政四年）

②



（安政五年）



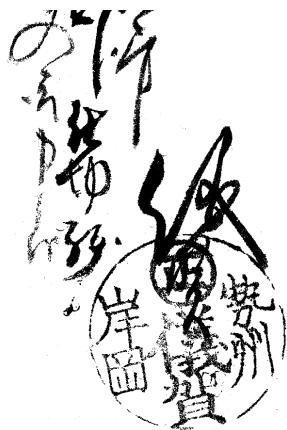
③



（嘉永元年）



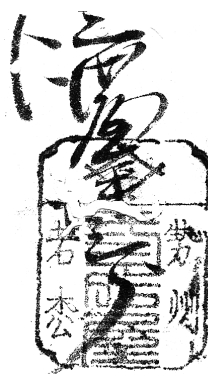
六 伊勢国岸田



（年不詳）



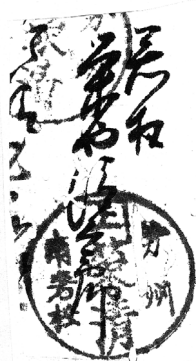
⑥イ



⑥ア



④



⑧



⑦



⑤

④～⑧ 年不詳

七 伊勢国長太



⑦



⑤



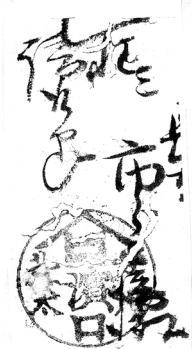
③



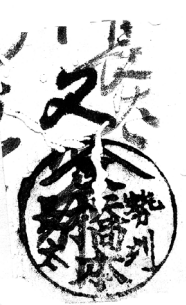
①イ

①ア

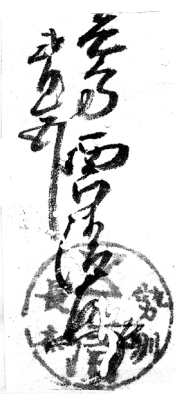
⑧



⑥



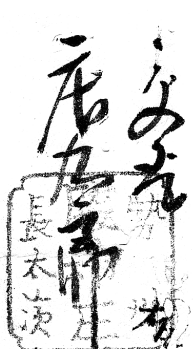
④



②イ



②ア



⑨



(①～⑨ 年不詳)

八 伊勢国箕田

①ーア

伊勢国箕田



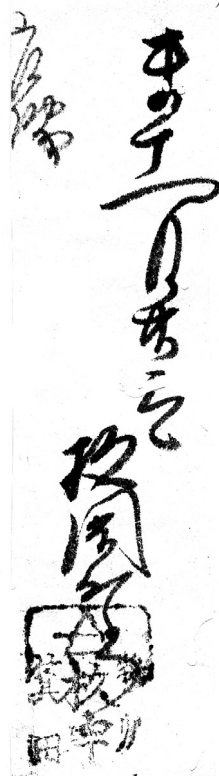
(安政四年)

①ーイ

伊勢国箕田



②ーア



(安政六年)

②ーイ

伊勢国箕田



③

伊勢国箕田



④ーア



④ーイ



①

九 伊勢国朝明高松



⑥
ー
ア

⑤



（年不詳）

⑥
ー
イ



④



（天保十二年）

②



（年不詳）

③



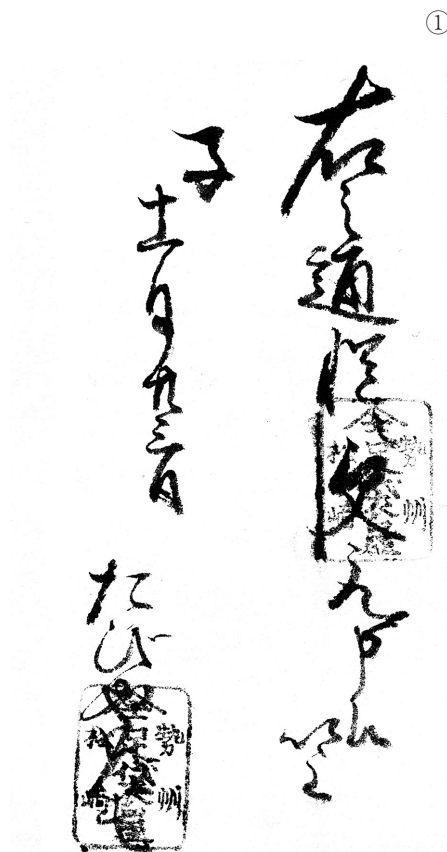
①

十 伊勢国白子

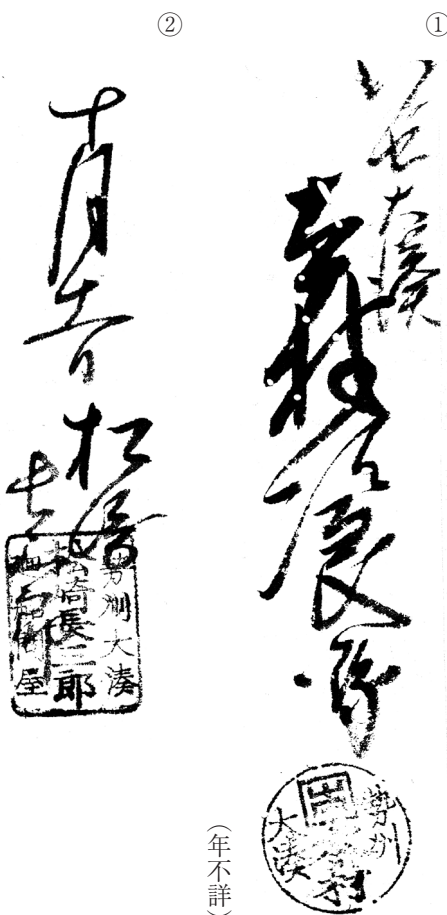


（年不詳）

十一 伊勢国松崎



十三 伊勢国大湊



十二 伊勢国楠北



十四 伊勢国不詳



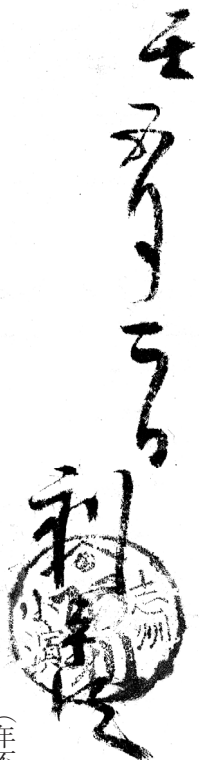
十五 志摩国雜載

①



(年不詳)

②



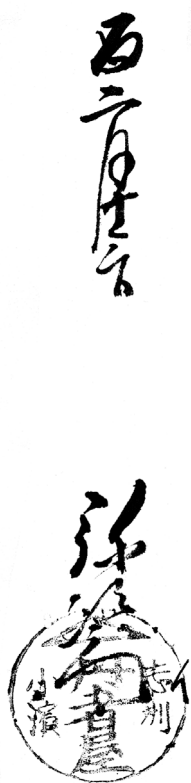
(年不詳)

③



(年不詳)

④



⑤
ア



(明治二年)

⑤
イ



(年不詳)

⑥



(慶応四年)

⑦



⑧

石道徳


二月廿六



（年不詳）

⑨


卯
 吉


（安政二年）

⑩

石道徳


⑪

石道徳


（やぎ いちお・京都女子大学名誉教授）